今昔物語集

四五

ル 4
2068
3

1256
3
2068
3

令治夜話巻之四

戸塚政興撰

詩歌之部

○鈴木家日記中康永之和歌并発句詩

正徳三癸巳八月十五夜

位剛くるるそらの御発句月もさやかはめぐりあふる

出句くく発句

名月や一月くに休む茅屋

○同年十一月八日　阪場山王権現隍く御入和

井橋広右衛門出の作くに仕せく

柴の戸を明暮は伊豆の海原の富士の根と打眺めつゝ

○同廿九日 初雪を見て 五仰と詠る

夕朝ゆふ八思ひ出でぬ人を千鳥の鳴く音の雪

○正徳五乙未三月十五日 久松氏 御成御所望

立春の打続きて寒しかり松吹の風も花の香そ

○同五月十一日 夕御料理 花味蒙仰御首座 和哥

なる

君やあの人柳の根の岸に出る舟の面に神ぞ

○享保元丙申歳 雪

少のことなれ月日八一日なる雪れとなるか

○同二年丁酉七月七夕御出題 秋夕雨 寄関恋

絶り七夕の星の上に夕霧の手を分て秋の雨

逢まる世を恋の義の乱れ 我あるうち月関は絶てい

○同八月十五 秋雨 ありてれは仰と蒙る

かりの宿よ月さへ雲の中 今宵は千年一とい

○同九月十三 歌仙 宮者仰と蒙る

いつもこの月と思へと年毎に 遠の山の端

同発句 月を仰 和歌 遠の山の端

同席小十郎 拾七 青八 今月には 高題 仰者

れハ

名をめでて詠むものを長月の後の雁のなかりしもの

○同歌合

竹の葉をさやぐ風の音ばかりふせんを隣と思ひなせとも

○享保三戊戌歳

朝戸明くる軒端の梅の花の香を春は来にけり

○同歌仙題二首　路歌合　梅先春開

諸人のわかぬ色をやいとはまし春を待ちかねて咲く梅の花

○日本の春を待ち咲く梅の花ちりはてぬとも匂ひ残れ

○享保六辛丑九月十三夜歌二首

月の光ありてあらぬ月の夜と雲の色ぞ秋の名残なりける

○同七壬寅八月十五夜　歌合　仰二首

おぼろなる月の光に秋の月雲の色ぞ恨めしきかな

○同九月十三夜二首

照る月を秋の名残やをしむらん雲の色ぞ新たなる

○同歌合

月の入る山の端の雲の色ぞ秋の名残ともなる

[illegible]

○享保八癸卯歳五

[illegible]

○四年辛亥

[illegible]

○四九甲辰

[illegible]

○享保十四己酉八月十五夜後東都蒙仰

[illegible]

[illegible]

雲りのく風も静なる中空に秋のすまるを月新

光亦称美

○同九月廿八日伊勢国松月軒慈源尼第に菊花

[illegible]

自新老翁子と先[illegible]

[illegible]

[illegible]

○享保十五庚戌歳試筆

池水[illegible]

○同[illegible]の[illegible]

[illegible]

○松山稲川氏ノ世頼三有祝詞菊湖ノ書野外雪
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

○元文三歳癸巳十七日 [illegible] 年[illegible]

辞世

四十余年江都城 行年六十一迎春山花開孫人生
[illegible]
[illegible]

附録

○元禄十三庚辰歳十一月廿五日
嶺頂院様御遠行ニ付康明奉願剃髪其後隠居額
御差留被遊 [illegible] 八月隠居号秋月

剃髪之詠　　鈴木助九郎 康明

本のゆかちる君髪山の哀さしとゝ毎ゝ袖そぬらす
康明ゆ池剃髪の中塚藻とゝ

賦一律奉呈　　同幣八康永

慶世若幽夢喜憂化一瞬無端泉下路慷也悲愁親
剃髪報君恩断魂諫又呻于時不怯客鳴呼奈臣身

○定基公御詠藻

試筆　享保八癸卯歳

佐保姫の霞の衣打かさね　色とりどりに春やきぬらん

歳暮　同七壬寅歳

年月のあはれ知るとはなしに　ゆくとしぞ人の身にしみぬる

同　八癸卯歳

ひとしほ春を待ちぞ知る　花咲ぬれば何ぞ雪と降て

試筆　享和歳

雪ぞ降る春の山路の長閑なる　春は来ぬとも人の知らぬに

多田有鉾本康永の記ならん記事なり

政與

○定基公　題思

しらわ世をつくむ人なれば　石の天地をるれるこころ何ぞ

秋懐同

つくもをもつくむ世を見せたれば　花ぞ春の春ぞ知れ

文のこころはなのこころの言葉　況ぞ心の世の世の政乱

添削申上秀逸の御詠　寄親に扶持と共

御ゝ寫遣ぬ

政與

寄松懐同　西行松の御詠

ちとせの春をまつの人と松ひとしほ　ひかれ幾世ぬ御詠ならん

春を待ぞ郭ぞ雪ー　政與

○定基公松尾淨寂寺御賜景御詩作之爲

文化年中淨寂寺より吾少之

賢君一日巡行封境之次辱曲

宴駕少時休于予寂寞之茅庵使予賦即興之野

詩厳命難默止忽卒述愚意備

尊覧茲林喜秀才依予韻裁和篇賜予沉吟之則

格律渾厚辞藻美麗也僕再鼓蔬荀氣聊攄寸衷

云爾

隨轉拜艸

風流曲駕興猶多當以何酬長者過因喜賢君恩澤

潤萬民抔野太平歌

余一日豫遊封内過淨寂寺前時寺主隨轉道人

裁一詩呈之句中周廉叔庶故事祝余唫賞之餘

聊步厥韻投之云

采女止源定基題

遥見寺門勝事多長年短日静中過少時駐駕聽流

水恰是祖宗證道歌

謹上

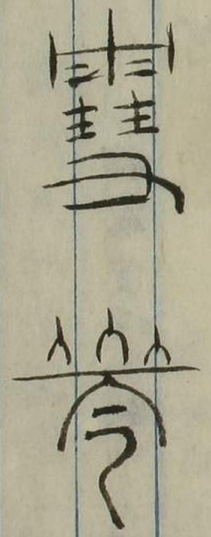
淨寂住

隨轉拜稿

日之先

賢君巡閲封内之次辱見駐
宝駕於予之茅菴予踊雀之餘綴蜂腰一絶備
尊覧既從容高吟數如翫味卒調雪曲是桂林
一枝崑山片玉矣一日三復猶不能已如愚蒙
文苑之稗稗詩林之樸樕徒作瓦荅雷鳴
曲前韻再裁野詩謹奉酬厥優奬云
再捜詩懐奈不多仰看雲上雁鴻過賢君惠我瓊英
賜一曲調高白雪歌
童過浄寂禪林和随轉道人所呈一律
米女令題

臘月迎春早好風及埜棠閣清心易足山遠眼難量
又手吟雙句揮毫裁数行禪心磨不磷一喝貫天霜
○定基公御印雪冬二字在江島氏一幅寫之



○定奉公御返哥一雲翁仙孫制
ひけ雪
人りこれ敢のこ尼ハ如郭改の梅は花の色香と

[illegible]

[illegible]

柳原[illegible]

○定基公　鵜河

[illegible]

出雲守　日野資枝　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○新撰定規　公卿　[illegible]

[illegible]

和歌

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○天華院殿御詠藻二首

春曙　日野一位資枝卿御褒詞の御哥なり

あらたまの春はあけぬと花の色のいろかさねの曙の空

照君

ゆくすゑ遠き千歳のたとへとはかねてしるらん君が

若宮二首岡部左金吾相模守輝貞

罷中関　常陸嬢子

名にしおふ関の関路をすぎぬれば月に旅ねの人ぞ多き

山家　理子

柴の戸はかすみにとぢて

ひとすがらいとふかくこそ

のきばかへ春

月の鶯はなき

見恋

立ちぬひく霞のひまもなく月の切ぬわけなりてなほふかまる

歳暮稅

ゆくとしの年の暮ぬ人ぞ多き代の駒ぞ人ぞ多き

左罷中舞倉庫空阿長差上ゲ花言葉いつ年と称すれば小御所女中のもと

たのしみとて　その後ハ芳山中納言持豊ハ御

つ入を後理子と御名乗られ　とん　のあと
疫ものひとそ
文化十四星の六月三日夕侍信左のゆとふ
て寄しとうとう来りゆくと云うて来る
政　具

按嬢いかりうし共三日本紙と面刻ず

○戸塚連塚のゆ〜野亭七蹴蹋の花盛るひと
ひ来り取ふ　いとゝのゆうげあれと用ゝみ
給ひて佳吟一章をめをみ給うぬ是なすう

とゆやもあ紀ゝ　を設りむとひ作る城と玉
とけゝ寺瓦塚あるゝ
あとの紫ゝ紀をえ　ゝるあさむ
ゝ所のてゝしハ竜も行ふ行ゝ
　　雅親

今治賦序

戸塚政興撰

夫惟人之為言也信矣然始於結構天氣可惡日和而至美醜者之論判日夜之衆謂量無外亦將死則何言也善哉乎只徒口耳等為年比欲作今治賦後起草以來逡四十五年而今已脫稿良久裁其者賦也如採薪浣衣之者詔何益之有但唱太平樂事在我性因雖不嘗執乎竊採蒲桃筌之罷賦以倣之而押韻橫之顏此乃賦之體也孔長短之句俱二句

者二韻四句者三韻六句者四韻且舉數名各用韻
其為對乎新舊賤貴重復雜殽譬如永樂錢文錢雁
頭共鏹之以通用雖篇中加自註其臻事實之考訂
無書無主後人正之亦幸矣只入耳而出放為臺有
時為柱句讀之壁為書為窟是積年之樂而可笑為
棟以成一家覽者察之冀摺之譫取之諧矣余但慨
焉調年然蹇芳頃歟高強攀雲嶽必被抓於天狗不
如與兒女俱笑談今世紙價大貴此賦固不佳也矣
因以不佳為題爾文化十四年丁丑初冬十里上縣
題於東都司馬樂亭

今治賦

今治とりとは張りと書りとりとりの字りは
淮の西りりて四国の本はゆる名所神と伊豫津
彦と伊豫津姫と磯取盧島の兄や淡路の弟筑紫
の兄抑日本の根拔京國とて大山祇のとし屋
形の越智皇子御理りを越智形とるむ申とる
りとり郷の名は橋の御或は日吉のつそとも
治字訓麽利徂徠曰春は鑑也夏は暑也蓋今治
猶言新開新田乎新治筑波之歌　珥比麽利莧
玖波塢須擬氏

日本説文鳳神島也中略五色備挙出於東方君
子國君子國日本也云々
按朝鮮國扶桑之北地故不蔭而朝鮮國名之乎
又築城を藤堂高虎縄張ハ渡邊勘兵衛と色々
即生捨石を鉄門の見附石城の名をとの小田
の長濱六條の城
慶長五年庚子藤堂和泉守高虎入部於豫州大
洲城同七年壬寅六月初築令治城同八年癸卯
二月二日令治町割成同九年甲辰城成就同十
三年戊申迄勢州安濃津城後藤堂宮内少輔在

城廿八年間寛永十二年乙亥迄伊賀國名張城
六條城一説云當城木丸昔六條大明神所鎮座
也因名欤今在藏敷八幡社地祭事不問之
小田長濱　不知其故或時問之於先師一雲翁
翁曰余若年時沖大工代財某者所持々一書備
以寫之即在其書中當城名及當郡古城古惣載
之然而翁亦不知其據云々
當家の沖入部寛永十二城下の六町都合丁二十
伊勢より沖伝ハ長濱ゟ〻て別宮ハ地蔵の大年寄
醫者ハ名ゟ刑ゟ久保四久保古きハ蛭餅や蛭鑑

米田屋ノ伽羅の油ハ菱屋ハ太乙膏ハ阿蘭陀山
形屋ハ丸ハ田の寶ハ秋田ハ朝ヒ
久保豆或田久保元智称ニ名家
又秋ハ鶯子ハ鶯子ハ唐薬又親の子惟章ハ
源家相雀鶏の此山もハ鶯の舊山親と魚鳥と
ハ三月の景物次ハ伊豫花尾藻ハ毛綿ハ波
布埼ハ相志ハ人どうハ出色ハ書ハ鬼形猿ハ
ハと鯉地と鶏の尾丁鮎川の札鷹羽兎
此山雀鶏松山家例年献上也称古能屋麻
按定ハ此ハ山高ハ秋ハ高ハ

註ノ伊豫ノ鷹ノ事也必逸物也
伊豫鹿尾藻　浪花産物家藻殿堂称ニ日本第
一
先師舊邸ハ川狩ハ鴨網ハ鹿狩兎狩ハ野陣
の備ハ立ハ沖内ハ出軍の試ハ師中門ハ西海の
蒙古襲来湯家関船の起リ塩瀬ハ鳴門ハ續き
彼渦の名ハ八幡数場の多ハ長崎ハ
西國関　三島衆勅朝鮮國国波國主恭奏姓名
朝廷此被禁止之而被許西海通船ハ運上ハ三
島衆故置関ハ三島ハ島来島ハ之三島衆

又曰関船是関所船也共出水軍集

見島は上島と大湯と四坂島と戚神は波乗地
しまと根と伊豫路土佐山と讃岐は坂明寺彈山
松浦島やら削島と鞆の白ひと仙酔山溪の松原
對の島は大川の浦と地の名ゝさ白岩と隅と月
とりと黒磯はつゝとれ姿潟は防風や松葉と松
原東風の帳新浦本の響一里の童は松葉稽
と梅人のるは小貝松ゝ
瀬本　夏は東風別甚有乾風言ニ之本此地ゝ
海風也　夷　回墓所言盤號同

松浦は深谷の志田寛又は戸塚の帝の屋敷報
新家ゝは芳明と井上の逐ゝ
芳藩春樹中深谷鹽寛櫻為甲矣
柱山の花盛と芳野の秀と勝の晴の名は つゝし
は就田は秋ゝは赤し四月は別名は大三島の
大和七月ゝ郷村の大地義の大蒲本山六ゝ至ゝ
風は山家の三ゝ郡は加藤は郡のゝどきは
中通りは農奴なるゝ橋と就堤は作禮山は望ゝ
きおゝ芳の鶏を婚の春は大歳
自郷村至五十嵐村六箇村曰中通

年號ハ雜魚麻せしより前の氏子駕輿丁ハ一下
肩祝ふや安産の霊験道鏡の位階と法皇越智皇
子社宝筆ハ百二十ヶ年と嗚呼服屋の古墳より國
分山の西篠塚の勇力安治の溪とも門服系國ハ
門田の家宝大森の鞍鐙伊豆熊野神社
三千國貪之新田義助之墓在國分寺衆兄義貞
卿土野新田任人弟義助卿同服屋村住人云々」
太平記曰暦應元年五月四日義助俄ニ病ヲ受
受身心悩乱僅七日過而終無墓成給云々
太平記大全云畠山荘司次郎重忠六代孫武藏

國生長新田殿ニ一人當千被憑篠塚伊賀守在
爰云々
或云伊賀守石碑在高威神島或云在魚島社地
未詳之魚鴻即沖ノ島也
溪　桜黒磯以南方今大新田村者埋溪地為南
至浅川則今治村也黒磯小為其溪々儲舊物可
知古昔惣社川随山北流而至此溪
又云清盛公弟門服宰相経盛公之裔門田長左
衛門某者世存龍岡村為村正
伊豫熊野ノ神貪々出現の沖神躰大須岐の森ヶ

禁裡御朝拜の御神衣于山と清水の産祇八幡村
と石清水勧請するき藏濟と御城内鎮守と芋植
山と廷智皇子北陵國分濱ゟ綱敷天神杉の
本ゟて聖廟の御祭東所ハ東埔寨ゟ名生の鮫
祭今法ハ櫓尻と宮永三つゝゝ櫓八幡今又御幸
伊豫熊野大權現有銘之神鏡自山中石巖掘于
時官吏上野某夢振神輿奉行幸共訟之于時
御初代公霊夢亦如此因被営築社壇及仁王門
芋植山大濱ハ幡宮社地古陵也起陵之日運土
砂以芋植故号之云

鮫山ハ牡蛎殻ゟ古の瀬戸と唱を朝倉ゟ代家宅
とハ神代の祭戸僧都の名ハ日吉山大阿の封し
ハ杉本村ゟ
鮫山在日吉村枝郷馬越村山石今尚有牡蛎存
祭戸在朝倉邑山中數十箇
高畑見山話云讃州豊田郡山林中多有之皆人
居之象
按神武紀曰自我東征於茲六年矣而中洲之地
無復風塵而今運屬此屯蒙氏心朴素巣棲穴住
習俗惟常嘗被柿山林經営宮室而恭臨寶位以

鎮元元此以林木経営宮室之始也

題松木村井　　十里上縣

自懲慳貪姫。千年鍜渋泉。何穿弘法井飲料前川。

不思議なれ汝法大師の所作とて屈の つゆ も 涸 ぬ 霊 験 あ る

泥川の泥泉ハ誰の時百姫が覓水と成り湊の石風

呂を辟退なり〻入江宮〻〻と大賓と大賓の

柳原柳土多くの水懐和霊の額ならぶ宮の明神

〻亂隙の巴ゆ楠原山ハ牛馬の牛玉所り

石風呂ハ鎌三郎生涯の仏業也

柳原ハ大濱村正至神輿行幸之辰象使七度而

出仕至葬表又又逢迎而参殿是四例也云

十二神樂ハ河野の世〻〻祝遊厳島の假面と御

苑家の奉納仰月〻ハ桂の寺〻赤梅檀の春雨〻

嘯月庵ハ閻浮陀金水の獨鈷〻滴〻て弘範の

雪今〻梵鐘の響れ世〻宮〻酒鶴の入江雲厳寺

の鐘も銘も無きの根を朝倉の松〻ハ青三位と

錫杖の滅のくるを燈岩あて仏礼の物て身と焦

すもむ舊ハ青苔の足寸踏跡の雪り徘行の起

ち西江東宮の鉢の〻て酒鐘を鑄り楼門の立

ト郎の施行て大宅〻聽文柳原り孝養不打〻殘

る理海の臺深く深て彫像四枚ハ燕尾なりの
つゝ蒙る

十二番神樂舊河野家御御〻夜遊也　此說河上
安國話

桂釋伽赤栴檀尊像〻〻但有傳可秘矣　面象衣
躰手足總以木理成文妙手之作如天造矣

別名村嘯月庵木尊觀世音也中古開帳之時落
首堪一笑

垂髮〻嘯月ハ人の錠〻ハ〻〻〻

芳ゝ梨宿も高ゝ行ゝ青三位

東吟者野僧不分何宗元禪宗也其性狂顛無欲如
痴惜每宿梵宇及曉天出庭中指空大笑人不知其
故矣昼出村巨托鉢得資常語曰勿令児臨水又曰
要慎火或有病者乞祈之治則荅之令吾不能死後
願我則應癒焉矣安永中病于郷村死矣因翁和尚
憐而葬之于海禪寺山中後不幾祈病而得治者不
少真如生前之言間之華名彼生前所預之米穀穀
苞在屋梁而煤或蠹物贈此寺未其數難計然至翌

八年癸亥秋近國遠境之諸人為群竟後年鋳鍾建
樓門焉
卜部武兵衛施行享保十七年壬子閏西釜鐘武兵
衛特発倉廩盡米麦自市中迄北新町施行之因豪
家谷助米而市人大助命是武兵衛之功也田米奉
行阿部伊右衛門記之達 公儀云
田坂城加賀守力超衆被撰蒙検校命代也燕尾換
換帽子之 也
利佐の一家の名字は千家蕉の母儀今江戸前
西行杉ハ長須の古跡也陸奥上人ハ河野の節目

摩尼と言野と称す寄し祇園清水八坂川の
傍五年嵐はいつもの西嵐山のもとに高橋八幡の
うぬを拔月樵の傍

長月庵若翁伊賀國上野板御庵在住後未浪花
諸曰芭蕉翁實母八今近庵也不詳其姓氏

西行松在宇摩郡長演村寶政二年庚戌五月因
宿而西行松仆余拔松實以貯之明年春培養
於庭中同五年琴丑正月見兒松稍長移以植之

旧地歌曰

西行松ふる苔木井杉の松の稚と聚樹とも いとくの

政與

ト作り名
稚子の見守あ後のあとせし法の松の手ぶ苔松の苔ものちん
樓余生涯之行狀傳未代著惟此一事耳

防河　一名一遍上人河野支屬

摩尼高野双峯並立見紙州野山之図

実ゝ大川の名掛りハ南北四十一箇村又越智郡
の野林西東千六里ゝ名先府中ゝ名の国分寺
一宇胡倉ゝ御厩地廣川ゝ總社川宮の池ハ藤の
名稱東倉の山の古谷ゝ名積の山ハ稲田

大川名称　社川号生橋畔有小祠号称社明神

忠見按大川舊自高橋村江山北入淺川然則
鳥生小祠名總社恐非也
唐崎池在新谷村自明和八年辛卯至寛政十一
年己未凡廿九年而成就同九月廿六日勸請三
島明神於東岡以為鎮守
稻束池在別所村自寛政七年乙卯至文化十四
年丁丑春凡廿三日而成就後當丑八箇村之中
河原稻依和之
金山勿拔佐渡金実説曰貫千金而得五百金者
也云々該曰咒詛人究ニ按義金究ニ言金出洞

穴開物入大穴處
三方の嶽ハ三郡の巔櫓山と温泉の境大川月利
で玉川鎌の若狭門ハ赤坂冨士四神ハ青龍接
津國ハ昇天白虎ハ長崎勝ハ通ひ来崔瞰田原夾
て玄武ハ迫門の雅處為ニ北ハ野ハ張翼の
二星ハ金沢の和極土地ハ三十四坡雲ハ多ハ多な
梁南北ハ代官所のかり両町ハ拝志谷
西町ハ酒造三村ハ新規店田樂ハ焼物ハ
屋鋪交易ハ柳陳の粧り賑ハ茂物ハ爆竹の餅の
穴と所山奇りの旅離時ハ苦りの為えりの猶子

丸五橋

目鍜門望東方有如赤坂富士按豐岡赤星二峯
中是

文化中高橋作左エ門伊能勘解由蒙　台命巡
國測量海内同五年戊辰八月到今治美項年任
嚴令作領中寸間地理圖式以之繩於海濱以量
國土之廣狹夜則一宿用掛衡測北極出地之度
而終著日本地理圖

錦交易店柳瀬忠治所考也市人揖士寡婦共得
益童謠之唐士也左義長餅欠今朝計

御山　石槌山參詣人年々壮也
八幡名所物吉澤の鷹山名の定家為信の新編
政亂の和歌山名の滑稽宝甘の夜
吉澤喜右エ門奉仕　御初代後奉仕細川家云
山名祖十郎左エ門賴賢初称細川藏人後改齋
宮十書名初毛童子後不交老翁能書而遁定家
卿真蹟者山名之書有之云
江島為信先生初称海老名長左衛門受兵法於
伊東玄竜入道後著持資流改正新編書共二十
八卷

谷蔭の吉口より石井の藤や五十嵐の蛍と云橋の
鶯秋々若葉の頃月の稽や影うつる出汐言ふあり
うつきそ家の門前と呼ふ故老の松此
鶯

吉口谷左就岡山嘗名庵

土人云城中唯有松出而三丸若能出身故城中
閑林々之韵而三丸聽弥千呂林々声真声韵両
可愛焉

按三才図會説反之
松の本らい唯一名つはしと称袋ゝ呼いわ松

望長庭そさて望春の門額と最上川の碑ま吉山
の眺ゝ四時の菊園その人麿のお月りゝ錦の
雲のも又ハ紅色の思ひのそゝ義之の鵝いりん
碑ゝ等

公々別荘号松本有老松偃卧数十仞者因名歟
望春亭額　南海公尊筆最上川二世甘棠公引
流水号之有碑臺上遠望姑射山百花千草冨園
園有布袋堂人麿殿義之祠　南海公見建時烏
石山人献笏於祠今在金庫
夫山ハ矢野の神山鳴の坂葛見山ゝ衣千山川ハ

呉川と貢川橋〃山里の橋と東の橋や地〃寒風
池除ノ堤の池記
或曰明神山即矢野神山也故石井之一村矢野
氏也尚可索東橋在八町村中寺村境一郡中此
二橋之外皆〃婆肆便之寒風池在立山
相〃伽〃〃〃

の金壺ゝ入ゝを量り出ゝとる寸崑崙人の湯沼
場ゝ柵の道後とも彼ノ頂ちハ曲ゝ多頭毘盧と
ゝそ辺ゝ事。撥ハ敗附子小児丸といハ淺州理
新しふ義兵衛火燈ゝ香和字堅ら衆寿庵のお
奈良ハ町瓦の御蹠跡又榎の実のゝ多くも榎の
柳ゝ

日本丸ハ古来迭大船日本丸之跡云可知濃ゝ
壮矣

唐人金壺 在城東門外一軀而口ノ洞名也投瓦報
與玉謝玉

道後 城北門外一町許而有水柵童男試水練
之處柵西有潮泉温池也久游者過而凍則浴之
俗呼云柵道後童男夏月其膚焦俗言之崑崙
人

相朝倉の金毘羅ハ他所ゝ多ゝ安ゝ家も
道前ゝ多ゝ金毘ゝ別宮ハ大沙弥又榎
の和ハ薬師寺焼魔寺ハ大寺寺ゝ神仏ゝハ頃申
堂榎郎の河ゝハ歯のゝ経とは揚枝ゝ榎くゝ榎
の地蔵ゝ乳汁の母乳の白粉を濃く虚空蔵人ハ
猪ゝ連れゝゝ疱瘡。流行ゝとゝ土居宮の

如法あて帯のりや勝らうかん

金毘羅　朝倉下村満願寺公拝所也

道前の歌

宇摩郡新居周布郡村越智郡野間風早と道前と

[illegible]

[illegible]神[illegible]祝の宮之橋の西陸邪道好

の越智七社を何の世かけて八幡中七ケ所言

のこゝ[illegible]ふ[illegible]橋よ宇福寺[illegible]か福寿

院や

萬福寺　伊豫熊野権現社地掘出石櫛銘云天

兼二年云〻中方古銅経筒銘云萬福寺寄進旦

各録姓字年号久安五年云

按當頼朝又一歳至久化十四化六百六十九

年也今四地之字号

萬福寺者存矣

今治福壽院三才図會出通路記曰禅宗也云

今何寺者歟未審之尚可考

山野の蒙昧ハ戮や狼猫や麻猿と狸乾雉多や山

鳥ハ鶏雉鶉多や八鵬ハ玉砂海鹿仏法僧ハ川鵜

海雁一年久松造酒屋之於大川洲大如雁羽毛

如少鳴其羽豆作箭題相

楠槻椅子栂榎檜五葉と櫻松杉椹柞榛桐楮と唐

櫨櫟と轆轤木

椅子俗字也正字柘 神書云稜威化櫛是也云

俗用椅子櫛者非也椅子、呼空凳為椅子按以柘

同字仮借者乎

稲の名ハ世りと六月土用ゴ代通称唐降ゴ五女

十五日 ハ大理ゆ赤大理 ハ小田苅 ハ寄田 ハ小田苅

ハ稲ゴ ハ三方と如作 ハ杉板久六や 櫟り作

北赤遠国ゴ ハ遠国黒 ハ家ゴ白万家ゴ ハ稔稲ゴ

ハ陸と五年迄白彌六や高田浦六ゴ 投 ハ附本と

稗ゴ分 ハ水陸形八分作 ハ丸ゴ ハ黒目ゴ下作ぶ

川ゴ ハ高ゴ ハ面作陸と法界ゴ ハ面 ハ陸や荒ゴ

形居田又晴六陸作 ハ 川 ハ 畔越 ハ 紅移陸 ハ 川陸

や裸麦ニ ハ赤発ゴ白松山ゴ ハ田ゴ ハ大ゴ ハ

慌燭ゴ氏名と関ゴ ハ菜屋と黒ゴ ハ又大麦

ゴ ハ川ゴ ハ と椹長小麦 ハ 赤 ハ 赤 ハ 関ゴ ハ と協ゴ

ハ

按搗藁之勝者四日苅米飯日新作田作遍路早

稲也小田早稲也其強如芋矣

產物類就岡羽二重毛織木地絞地方々ハ蒲萄ハ紙
濃蓆を殿町爲方ハ生り大豆因方ハ餅琉球芋
や煙草りんで石焼ハ河内ハ紫草
取玉草藁草引ト沿石ハ印影の大爲石
て片石と字唐郡地石ハ大川と號の字石泉川砂
利や弓削爲砂利石井土々名駒土瓶土と國分土
就岡羽二重毛織異名絞ハ烟草也鮎川木地之
烟草絞麩半而品共濡葉而火存故五月農夫必
用之
紙漉藏敷村殿町拜志外

平草旧未無之近年火之按字治遺曰破戒僧化
爲平草冊州里人費僧云破戒之業因已脫後年
不生笑徒明年如其夢云比石在中曽根村石床
山與
砂利在弓削鯨浦赤砂利在宮敷泉川
竹ハ朝倉杉掠名篁仆篁竹等弱仆至毛笹杉皮檜
縄ハ檜皮又烟竟地炭竈ハ塩竈瓦ハ石灰陶器竈
篁竹在河内谷所林其色青黄斑文
川魚ハ鮎鱒ハ川鱒鮒鱒ハ赤ハ老泥亀ハ八月
ト泥魚ハ川かゝ勢

鮒一作鄭豊田郡名エ門云王城十里内者是鮒
而餘国生者其形大同小異名曰泥口
八目鰻在高市川腹有紋如八目俗治府
抱海津物ハ鯛鱸鮫ヤ鰊渕麦鰯鰆鯵鰆鮎為賊鮟
鱇保魚ヤ鯡魚鰈海老糸ヨリ飯鮹ヨ奥海鼠小鰯
鮪大内魚ヨ海鄭子
海鄭黒鯛也泉革淳海多出之故名云
貝類ヨ螺宮螺かめの貝ヤ牡蠣長作ヨ下田味
螺ヤ蜊螺の子ヤ蛤ヨ似ぬるヒ海兎竹神馬竹ハ
花ヒ海雲ヨ寅ハ蛸ヒ貝名藻ヨ海藻和布紫海苔
ヤ青海苔
いヒ海苔ヨ鯨ヨ鯨ヨ鯨加鱶海鹿鰐斯異ヤ湍坊海
法内ヒ
鯨大如鯨一列凡二十尾有時一魚顕頭背尾而
入則列魚各如其執如旋車輪其響如迅雷余一
夕洋中遥見之於渓濱問之村老答曰是鯨也頃
日未集于此海為之無猟也
鰐四足魚也歯如鋸数千参差生三重也一時大
濱惣治語云父惣治者一夕出海辺見洋中揚渦
怪而舟到彼所則大鱶如臼者胴半而其頭浮面

也為獲繫之于舟而漕帰于時見海底而鏡光是
大魚之雙眼也大恐怖而斷繫饗之縄速漕帰舟
着砂汀則楫士忽倒悠治斧而入屋忽絶息與藥
各漸後矣
所謂喰饗之鰐也云
斯異　正字不詳水獸也大旱歳夜出海入村里
而害牛馬一年獲之於烏生村大如猫密毛灰色
面長似狸四足短尾丑指間懸蹄如獺銃仇如鷲
両眼細目額中生白毛恰如豎目世人曰一目獸
着誤也

海坊主大亀也有時瘢着出其頸及肩而浮泳其
形如直泳因号之云
たゝ凄き物多持杉玉の渕于底の桶底大渦の眼
有りといふものハ舟を逃雷山みこゝ朱壺の壺や
海人の家の壺人び
玉の渕傳曰人過而溺于渕則要浮而到下口溺
水者至底則浮者必然若大渕底水勢回旋而不
得浮故欲速浮則宜張手足作大文字忽浮者也
大川桶底　軽砂如霰桶其蹈強則底陷之意乎
水怪　俗云舟幽霊叔父高木方副話云一夜細

雨與佐藤氏俱楫舟往大濱帰村正惣治迷未洋
中遥見一漁火在大川洲辺比至爲磯彼火遮而
逼此舟近視之則扁舟懸帆柔也舟中悉燐火而
有三夫被半衣玄燐中于時無風而其舟疾如矢
欲問之惣治則使舟中粛默矣去後語曰所謂舟
幽霊者也毎暗雨必見也矣忠見按漁舟網捕魚鰹膏油沽着舟中過
雨則必発燐火不足怪也

今ハ亡りて佐治都が荒亂形藏のお連踊木村
の蛍と木市浮瑠璃

今著言指　沖先代之初国風曰扨賑沖国ノ繁

昌阿波ノ佐治都木村蛍家并轉籠島木村養山
愛蛍田藩中弄養禽
越後屋新藏老去善踊阿連者哥舞妓也構戯場
于拜志彌之其傳也
木屋市郎兵衛者楫士也常住浪花能優曲
迚くハ演義演彩五内溪太祇屋敷川口善清船場
高麗橋
大史り彌盛ゑる物ハ文武の學諸道の
師ゝ琴碁の達者和漢の書画師石原ゝ藝伝敬
きゝと演ずて女四ゝ琴冪焜ハ形義工夫多ゝ一寸
の中鄭師ゝ寸箇ハ百目の義打

石原半平信遠者康和興士稱埼之馬門人大條
流調鳥銃之術法且鞍作古傳得之蓋関西一人
耳

友田藤九郎善信者善算術亀鶴流炮術永野字
善衛門人方板破門後造各筭盤計藥量知所向
神速之秘器也号工夫各筭炮術矣
曾案曰宣治者元松山家時討師某之子後事
今治造一寸半鶏沖先代嘗　命造八分半鶏最
奇工也

牧野十善衛者善自縁流炮術造三寸之短炮放

跋

戸家者作今治賦以示吾曰子家是一公之
賦所戴仰也吾日未賦第此國字
賦之鼻祖也其文章今賢人口不
不自量聊做其辭製以供以童蒙
耳之為賦也每自之聊置通之用
字以為叶韻若乃不拘韻者必用異字
異之格字字知為之賢乎乃耶乃之
賢乎乃耶於是吾顧之賦是之沿
革山川之形勢村里之流俗古今之

習俗奢侈之賦中之加負担之辭
言素歷爲夫居其位而不知言之
天下皆是也若夫人藉之有
知國土之仮事乃其補益乃多矣
彼云事殘使則使矣光之國之文
所今斯篇能屬戲謔而於人者
裨益歟云美戲謔者不爲虐乎仁
爲者有爲者
戊寅冬日

[illegible]

者大哉此国風大哉此国風以爲銘句爾

一百月九日試所後献之

初規庵名酒と京菓子雛扇子金物漆物と諸物系
器金魚桶水盆湯屋鉢牡丹と形ちい程書て
玉鐵敦盛い鞍りの食類天窓で帽い九設元ぬく
九い嚊貢地面の人百日ゝ殊家表形新年ゝの
嬢ゝ氏いゝ泳手寸二名の幸と戸毎ゝ凧ひう
杵ゝ踊ゝ金沿ハそも太しゝ百なゝて也新い河
けぬそと巻ゝも也人ゝ梁

鄭曲曰玉鐵媛敦盛家真齢二人

幀或曰鎖竜宮之文章生也故曰章魚文人泛海

釣則章熹大集此回好相倚者也

題鮎釣　　十里上縣

常聞迎白樂伯吉作漁翁今詔章魚釣漁翁伯吉

豐

苔衣ぞ[illegible]交の義建[illegible]衣[illegible]茅と[illegible]

鴨村方言得妻曰婦〻

弥弥之二名合而義我之訓自通土俗云今詔非

不孤明矣　按秋七月祝此国風四民共踊連夜旦

毎妻礼酒酬主唱之則客和賓抃則満座躍更非

餘曲所及也夫此曲也古今不易而今国中唱和

3年11月